多くの人が涙した、
心が癒されるヒーリング・ストーリー

ほんとうの幸せ

岡本マサヨシ
古珀術師

現代書林

多くの人が涙した、
心が癒されるヒーリング・ストーリー

ほんとうの幸せ

岡本マサヨシ
古珀術師

現代書林

はじめに

あなたが今、この本を手にしているのは、偶然ではなく必然です。
本書を読み終えた後、「私は本当に幸せだ」という心の声をあなたは聞くことでしょう。

私は現在、心の癒しと美容を融合したヒーラー美容師として日々活動をしています。
二〇〇八年に完全個室型の美容室、店名「桜千道」をオープンしてから、私は次々に奇跡的な出来事を体験し、感動を心と身体で味わい続けてきました。
美容師でありながら、日本古来の秘術として伝わり続けたヒーリング技術を習得したことが、私の人生を一変させ、幸せに導いてくれたのです。
過去に経験したつらい体験「トラウマ」に縛られ続けることを手放し、「私たちは究極の愛で守られている」ことを皆様にお伝えしたく、二〇一一年に『本当の幸せ』というタイトルで書籍を出版させていただきました。
「感動して涙が止まらなかった」
「大切な家族と心から分かり合えた」
「自分の執着心を手放すことができた」

「引き寄せの方法が心から理解できた」
読んでいただいた方々から素敵なお言葉をたくさんいただきました。
そして、もっと多くの方に本書を読んでいただけたらと考え、内容をより分かりやすくした改訂版を出版することにしました。

本書は、私の美容室を訪れた女性が、ヒーリングとコーチングで心から癒され、本当の幸せを見つけた実話がもとになっています。
誰にでもある日々の悩み、「家族関係・恋愛・仕事・病気・お金」などの悩みを解消し、心の底から「今が幸せ」と言える人生を手にしていくためのエッセンスが盛り込まれています。
本書を読み始めることにより、あなたは自身のつらかった経験を手放していくことでしょう。過去のトラウマやインナーチャイルドを手放し癒すことで、「究極の愛で守られている」ことに気づいていくはずです。
では皆さまを、「ほんとうの幸せ」に続く扉へとご案内いたします。

二〇一二年八月

岡本マサヨシ

ほんとうの幸せ　◎　目次

はじめに　3

幸せへの第一歩　9

ヒーリング体験　26

「心のすす」が本当の自分を見えなくする　39

マサヨシの過去、スピリチュアル能力の兆し　44

手放すことができれば、執着から解放される　50

「ワクワク」か「モワッ」かを心に聞く　53

安心して手放す　60

ワクワクするものを意識が引き寄せてくる　66

マサヨシの過去、上京　69

マサヨシの過去、誕生から幼少期　74

マサヨシ、思春期と母との思い出　86
仕事にはお互いの感謝が存在する　94
成長を感じられない恋愛・結婚は執着になる　102
過去のことを話してもつらくないのは、トラウマが少なくなったから　106
恵の過去、幼少期　108
恵の過去、思春期　111
恵の過去、妊娠　115
恵の過去、家庭崩壊　122
相手を鏡写しにして自分を見つめなさい　146
過去に犯した罪は、学びとなって目の前に現れる　152
どんな相手にでも、感謝の気持ちを持つことはできる　158
マサヨシの過去、ばあちゃんへの手紙　160
エゴを手放せば、心が晴れ晴れとする　169
マサヨシの過去、帰郷　173
マサヨシの過去、祖母の死　183

マサヨシの過去、母の死　187
マサヨシの過去、母との再会　197
マサヨシの過去、運命の出会い　201
マサヨシの過去、ヒーリング体験　210
マサヨシの過去、魂の気づき　217
人を変えることはできないが、気づかせることはできる　224
いちばん近い存在は、いちばんエゴがでやすい　229
迷いが生じたら、先に行動することで流れができる　234
母への感謝　240
幸せはシンプルに存在している　247
おわりに　253

幸せへの第一歩

木下恵は、鏡に映る自分と流行の雑誌を交互に見ながら悩んでいた。

「う～ん……、やっぱり髪は長い方が男ウケいいよね～。エクステンションつけようかなぁ。つけるとしたら、どこの美容室がいいんだろ？」

突然、カバンに手を突っ込んで、ぐるぐると中をかき回すような動作を五回繰り返すと、「あー、もう！」と面倒くさそうな声を出して、恵はカバンをひっくり返した。カーペットに中身がぶちまけられる。

レシートやら化粧道具やらが散らばった床から、恵は携帯電話を見つけた。

「あった♪　あった♪」

タバコに火をつけて、携帯サイトを開く。

「〈越谷市〉〈美容室〉〈エクステンション〉……で、いいか」

独り言にしては大きめのボリュームでしゃべりながら、自宅から近い美容室を検索し始める。

「『髪処　桜千道』？　なに、漢字ってださくない？　次、次……」

……二〇分。……一時間。

どんどん時間は過ぎていくが、なかなかピンとくるお店が見つからない。
「えぇと、〈越谷〉〈おすすめ〉〈美容室〉……『髪処　桜千道』」
「んん……〈埼玉県〉〈エクステンション〉……また髪処なんとかだよ。はい、次」
「じゃぁ、やっぱ〈越谷〉〈エクステンション〉〈得意〉……またぁ？」
何度も検索をし直すが、いくら検索ワードを変えても『髪処　桜千道』がトップにヒットする。
「なんだかなぁ～、もういっか。他によさそうなとこないし、しょうがない。とりあえず電話してみるか」
店の名前から感じる古臭いイメージに気が進まないまま、恵は電話をかけた。

「はい、桜千道です」
電話先の男性の声に恵は緊張した。
「あ、あの、エクステンションをつけたいんですが、もしかして今日って大丈夫ですか？」
「本日はエクステンションのお色に限りがございまして、かなり暗めのものしかございません。お客様の地髪のお色は、今……」
「あー、いいです！　いいです！　今日つけたいのでお願いします!!　色もそれで!!」
電話をかけて勢いがついた恵は、カラーのカウンセリングをしようとした男性の言葉を

最後まで聞かずに押し切った。
「あぁ、はい。ありがとうございます。では、一八時でいかがでしょうか？」
「大丈夫です！　よろしくお願いしまぁーす！　失礼しまぁーす！」
電話を切った恵は、三二歳の女性が着るとは思えない、露出の激しい派手な服を引っ張り出し、三時間後の美容室に向けてメイクを始めた。

肩のはだけたTシャツにホットパンツ、ヒールが一〇センチ以上あるサンダル。肌が隠れている部分の方が少ない格好だ。
デカ目効果を狙って、パンダみたいに目の回りをグルグルとアイラインで囲っている。

「うん。今日もイケてる」
恵は、北越谷駅のトイレの鏡前でつけまつ毛がずれていないかをチェックすると、お店へ向かった。東口を出て二～三分。
「『髪処　桜千道』……ここか」
恵は小さなピンク色の看板を確認して扉を開けた。

「いらっしゃいませ」

一人の男性が温かく迎えてくれた。
「あ、すいません。今日、一八時に予約をしていた木下ですけど」
「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」
案内された席に座って、恵は店内を見渡した。
「あの……、お一人でやられているんですか？」
「ええ、そうです。当店は、完全予約制の個室型なので、常にマンツーマンなんですよ」
「へぇ～、そうなんですか。すごいですね～」
「初めまして。店長の岡本マサヨシと申します。今日は数ある美容室の中から当店をお選びいただきまして、ありがとうございます」
「あ、どうも……よろしくお願いします」
マサヨシはニッコリと微笑んでカウンセリングを始めた。
「木下さん。やはり髪の色が明るいですね。でもきれいに染まっていますから、この色に合ったエクステンションをおつけした方が、やはりいいと思うのですが？」
「昨日、他のお店でカラーだけ済ませてきたんですよ」
「そうでしたか。ただ先ほどお電話でもお伝えしたのですが、今日ご用意できるエクステンションがこの色しかないんですね」
とマサヨシは、恵にエクステンションを見せた。

「ほんとだぁ。だいぶ暗くなっちゃいますね」
「そうなんですよ。もし今日どうしてもご希望でしたら、エクステンションの色に木下さんの髪のお色を合わせないと、バランスがおかしくなってしまいます。いかがなさいますか？」
「あ……いいです。今日つけたいので、そのエクステの色に染めちゃってください」
「今の木下さんの髪のお色、とてもお似合いだと思うんですよ。もし、二日待っていただけるなら、木下さんの髪色にぴったり合ったエクステンションが届きます。それに、もし、やっぱり色を明るくしたいとなると、カラー代金もエクステンション代金も二倍かかっちゃいますし……」
「うん……大丈夫です。暗くなっちゃっても、かまいません」
「本当に大丈夫ですか？　染めちゃいますよ」
「はい大丈夫です。お願いします」
「そうですか、かしこまりました。では、カラーの準備をしてきますのでお待ちください」
マサヨシは店内奥へと姿を消した。

店内奥から、シャカシャカとカラー剤を混ぜる音が聞こえる。
恵がそわそわして待っていると、奥から信じられない言葉が聞こえてきた。

「木下さん、サービス業をされているんですね。あんまりお酒、飲み過ぎない方が体のためにはいいですよ。……なるほど、四人家族で……妹さんがいらっしゃるんですね」

突然、職業や家族構成を言い当てられて驚いた恵は、マサヨシのいる方に身を乗り出した。

シャカシャカシャカシャカ……。マサヨシは、平然とカラー剤を混ぜている。

（……なんだ？　この人？）

「あのー、なんで分かったんですか？　私、何も言ってないですよね……。もしかして占い師？　何も話してないのに、色々と分かっちゃうとか？」

マサヨシは恵の後ろに立ち、髪にカラー剤を塗りながら、丁寧に答えた。

「**はい、何でも分かりますが、僕のは占いではなく、リーディングと言います。**リーディングとは、宇宙の情報ソースにアクセスして、お客様の知りたい情報や必要な情報をお伝えするというものです。普段はリーディングメニューのご希望がなければ見ないのですが、木下さんの情報は『見えて』しまいました。まれに、今情報をお知らせすることが必要なお客様に限り、自動でリーディングしてしまう場合があるんですよ。木下さんも、必要だったんですね」

「……？」
恵がキョトンとして聞いていると、マサヨシは続けた。
「色々と、悩みを抱えてらっしゃるようですね」
確かに、恵は仕事・家族・恋愛・体調……とたくさんの悩みを抱えていた。

（なんだか、この人すごそう……）

思わず、テンションが上がった。
「そうなんですよー。私、こう見えても結構悩みがいっぱいあって。最近は占い師とかめっちゃ探していたところだったから、すっごいビックリ！　すっごい偶然!!」
「なるほど。今日はそれもあって、ここにいらしたんでしょうね。でもね、これは偶然なんかではないですよ」
「偶然じゃないんですか？」
「**つまり、引き寄せ合ったんです。**悩みを相談したい・将来の不安を解消したいと考える木下さんと、そういった人を救いたいと考える僕の思いが現実となって、今、ここにいるんです。偶然ではなく、必然なんですよ」

ピピピッピピピッ。
タイマーから、カラー放置時間の修了を知らせる合図が鳴った。
「さっ、シャンプー台へどうぞ」
カラーを流し、シャンプーをしながらマサヨシは言った。
「先ほども言いましたが、僕は占い師ではないです。ヒーラーです」
「ヒーラー？」
「はい。そうです。僕は美容師なのですが、ヒーラーでもあるのです。毎月多くのクライアントが、この店に古珀術（こはくじゅつ）ヒーリングを受けに来られています。そして、皆さん悩みを解決されています」
「古珀術ヒーリング……ですか？」
「はい。そうです。その話はまたゆっくりいたしましょう。髪の方ですが、洗い流せていない場所はないでしょうか？」
シャンプーを終えると再び鏡の席に移動し、今度はエクステンションを取りつけ始めた。
「……さぁ、エクステンションの取りつけが終了しましたよ。いかがですか？」
「わぁ～。このエクステ、サラサラですね。それに装着早くないですか？　まだ二〇分くらいしか経ってないのに、すご～い」

「では、これで終了となりますが、髪型は気に入っていただけましたか？」
「はい。色もなんかいい感じですね。ありがとうございました」
会計を済まし、恵は桜千道を後にした。
家に帰ると、また鏡に映る自分と流行の雑誌を交互に見始めた。

（う～ん……、なぁんか気分よくなって帰って来ちゃったけど、やっぱり、色暗すぎるかなぁ……？）

恵はタバコに火をつけると、携帯から電話をかけた。
「あー、もしもし、リナ？　お疲れぇー。さっき美容室に行って来たんだけどさぁー、なぁんかカラー失敗したかなーって思ってぇ。今から写メ送るから見てくんない？」
「うん。いいよ、いいよ。待ってる～。恵さぁー、今日出勤だっけぇー？」
「うん。出勤だよ～。あっ思い出した。今日の美容師さぁ～、私なんも言ってないのに、なんか職業バレちゃったみたいで……家族まで当てられちゃって、すごくな～い？」
「え、何それ～、わけわからん。それより写メ送ってよ」

出勤準備をしながら写メを撮って送ると、さっそくリナからメールが返ってきた。

《いいんじゃない？　似合ってると思うよ》
《えー、マジで？　暗くない？》
《いーじゃん、たまには》
《そっかなー。とりあえず店で見てくれる？》
《了解♪》

店に着いた恵は、店のタイムカードを押すとメイク室に向かった。
「おはよう～」
「おはよう～恵。いいじゃん、さっきの写メより全然いいよ。似合ってるよ」
リナはそう言った。
「え～そうかな～？　なんか色暗くて重くない？」
「うん、うん。全然大丈夫だって。たまには新鮮でいいじゃん」
「ん……。でも、なんか可愛くない気がする……」

恵は褒められているのに、どうしても納得がいかなかった。そしてお店から美容室に電話をかけた。

「もしもし。すみません。遅くまでやってるんですね。今日エクステンションをつけていただいた、木下恵です」
「あ、どうも本日はありがとうございました。いかがなさいましたか？」
マサヨシの声だ。
「え～、実は友達とかに見せたんですけど、みんな髪色が前の方がいいって言うんですよ。私は気に入ってるんですけどね」
「はい。そうでしたか」
「やっぱ～、すぐつけ直したいんですけど、明日とか無理ですかねぇ？」
「明後日でしたら、ご用意できます。ただ、もったいなくないですか？　またカラーリング代金とつけ直すエクステンション代金がかかってしまいますが、よろしいんでしょうか？」
「はい、大丈夫です。明後日の何時でしたら空いていますか？」
「そうですね。今の空き状態ですと……、一八時で予約をお取りできますがよろしいでしょうか？」
「はい、よろしくお願いします」
「では、お待ちしております。失礼いたします」
電話を切った恵は、一日、憂鬱な気分で仕事を終え帰宅した。

待ちに待った、美容室の予約の日。恵は二〇分も早くに桜千道の扉を開けた。
「ごめんなさい。ちょっと早く着いちゃいまして〜、大丈夫ですか？」
「あぁ、はい。すぐ用意いたします」
「この前、店長さんがせっかく『二日待った方がいい』って言ってくれたのに、強引にやってもらっちゃったから……。なんか、逆にすみません」
「いいえ、大丈夫ですよ。なんとなく、こうなる気がしていましたので。では、お席へどうぞ」
「……なんとなく、こうなる気がする？」
恵は首をかしげた。
マサヨシはニコニコしながら話を続けた。
「僕にはリーディング能力があるって、先日お話したのを覚えていますか？　木下さんの髪色をカウンセリングしている時も、〝本当は明るめのお色が好きな方〟って、情報が私の中にはあったんですよ。あの時、ちゃんと納得していただけるようにもう少しお話しておけばよかったですね。……その代わりといってはなんですが、通常でしたら、エクステンション装着後のカット料金がかかりますが、今回は無料にしておきますね」
「え〜いいんですか？」
「はい。もちろんです。それでは、エクステンションのお色も、木下さんの地髪の色も気

に入っていただけるように、今回は僕にお任せいただけませんか？　必ずお似合いになりますようにお作りします」
「はい。お願いしま～す♪」

恵は嬉しかった。どんな美容室で髪をやってもらっても、「本当にこれでいいのだろうか」と考えてしまって、こんな気持ちになることはなかった。それが今回は珍しくワクワクしている。初めて美容室で何か打ち解けられたような気がして、張りつめていた気持ちが一気にリラックスした心地よい気分に変わった。

そして、二時間後、施術は終了した。

「わ～すご～い♪　こうしたかったんですよ～♪　最初からお任せすればよかったですね！　本当にすみません。ありがとうございました」
思わずそんな言葉が恵の口から漏れた。
「いえいえ。気に入っていただけたようで、僕も安心しました」
「あの店長さん。今お時間ありますか？」
「はい。この後はご予約が今日は入っていませんので……。何か？」

「実はさっき、カラーリングをしてもらっている時に古珀術のパンフレットを見たんですが、これって本当なんですか？」

恵が手にしたパンフレットにはこのように記載されていた。

【素敵なエネルギーワーク古珀術のご案内】

究極の美。それは心の内面を浄化することにより生まれます。そして外面の美しさもまた、より輝きを見せるものです。内面をクリアにして純粋に意図を持てば、素敵に輝いたあなたになります。自分らしく夢を叶えていきたい、そんなポジティブな変化をお望みのあなたをお手伝いします。

エネルギーワークは八分間、目を閉じてエネルギーを受け取るセッションです。用意するものはただ一つ、「変わりたい」という気持ち。これを一週間に一度くらいのペースで二〇回行います。

ふとした瞬間に、あなたは自分のちょっとした変化に気づき、それを楽しみながら毎日

を過ごすようになるでしょう。そして二〇回を終えた五ヵ月後には、あなたは本来なるべき本質としての自分に気づき、もともと持っていた豊かな心を取り戻すことができます。

「目に見えないエネルギーとか、力とかありえるんですか？　まさかこんなの信じられないって言うか、意味解んないですよ。これをすると幸せになれるんですか？　なんで？」

質問だらけだった。

「信じられないという気持ちはよく解ります。実際に僕も最初は信じることができませんでしたから。半信半疑で体験したことを今でも覚えています。**『エネルギー』は実際に存在しています。**この電話も電波というエネルギーの波です。そしてこの空気も目には見えていませんが、確かにここに存在していますよね」

マサヨシは鏡越しに恵の目を見ながらさらに伝えた。

「ヒーリングを受け終えたクライアントさんたちは、『私に起きたことすべてが必然だったんですね』と、よくおっしゃいます。でも、受けられる前には『なぜか自分の過去は苦し

くて、つらいことばかりだ』と感じられていた方も多いんですよ。ところが、ヒーリングを受け終えた方々は、微塵(みじん)もそうは感じないんです。逆に、これまでの経験をありがたいとさえおっしゃるのです。**大切なのは、今をいかに生きるかです。そして、それを決めるのも自分なんです**」

「私は自分の人生を否定することしかできないです……」

恵は少し間を空けて続けて話を始めた。

「本当は救われたい気持ちでいっぱいなんです。本当に幸せになれるものなら、私だってなってみたいです。でも正直、信じられなくって。目の前の店長さんは本当に幸せそうで、私もそんな風になれたらいいなって心から思います。実は今の仕事もあまり楽しくないし、生きていることにすごく疲れているんです。今も病院に通っていて、こんなにたくさん、薬の袋を持ち歩いているんです。変ですよね……私……」

急に下を向いて落ち込んでいる恵にマサヨシは優しく問いかけた。

そして、他界した母の記憶がマサヨシのなかで重なり始めていた。

「大丈夫です。必ず木下さんには『自分は幸せだ』と言える日が来ます。もう少し、お話をしたいところなのですが、今日は少し時間が遅くなってしまいました。もしよろしければ日を改めてご予約いただけませんか？」

「ごめんなさい。もうこんな時間になってたんですね」

時計の針は二三時四〇分になろうとしていた。

「木下さん、今度いつでしたらご都合よろしいですか？」

「実は明日もお休みなので、もしよければ明日はどうでしょう。空いているお時間ありますか？」

「承知いたしました。明日のお話次第では、ヒーリングを体験してみませんか？　実は今の木下さんの状態は病気や仕事が原因ではありません。そのことについて明日詳しくご説明いたします。明日の予約状況は、夕方一六時三〇分から一時間が空いていますのでいかがでしょうか？」

マサヨシはそんなことを言った。

「大丈夫です。では明日もう一度来ますのでよろしくお願いします」